

「上流医療」を理解するための象徴的なエピソードがある。

宮城県気仙沼市の中心街から車で数十分。舞根湾に流れ込む大川の河口に畠山重篤氏の経営する牡蠣とホタテの養殖場、「水山養殖場」がある。畠山氏が海の異変に気づいたのは70年前後のこと。夏に赤潮が発生し魚がとれなくなったのだ。「赤潮が湾の奥から発生するということは排水による川の汚染ではないか」と畠山氏は思った。84年、フランスの代表的な牡蠣生産地に視察に行くと、現地の養殖場は気仙沼と同じようにローヌ川やシャロンド川などの河口域にある。畠山氏は牡蠣の養殖には改めて川が重要だと確信した。

しかし、宮城県は88年に新月ダム建設計画を発表。「これができたら気仙沼は死んでしまう」と、悩んだ末に畠山氏が辿り着いた結論は、大川の上流の室根山に木を植えることだった。この提案に70人の漁師が賛同し89年に「牡蠣の森を慕う会」が誕生。大川の水源地である室根神社のそばで第1回の植樹祭が行われた。海をきれいに

(AJKD)に報告し、扁桃パルス療法の普及活動と臨床データの蓄積を重ねていく。

同療法は、慢性感染巣と考えられる両側口蓋扁桃の摘出と、ステロイドパルス(3日連続でメチルプレドニゾン500mg点滴を行った後、経口プレドニゾン30mg連日4日間で継ぎ、これを1クールとして3週連続で計3クール施行する)の2段階で構成される。

仙台社会保険病院腎センターでは、年間約150人のIgA腎症患者に扁桃パルス療法を行い、早期発見・早期治療であれば80%以上が寛解に持ち込めるとしている。全国的に透析患者数が増加するなかで唯一宮城県だけが09年を境に減少している要因はここにある。

堀田は講演のなかで、「原因がわからない疾患はあるが、原因のない疾患はない。病気を治すには、体の一部だけでなくすべてを診る必要がある。病巣感染ですべてが解決するわけではないが、従来の対症療法でしか対応できなかった疾患にも新たなアプローチが可能になった」とし、これを「木を見



相田歯科クリニック院長 歯学博士 相田能輝

実践する「上流医療」

するには上流をきれいにすることが必要という畠山氏の考えは、北海道大学水産学部の松永勝彦教授(当時)の研究によって、科学的に森と川の関係が裏づけられ、新月ダム建築は廃案になった。

河口域でおいしい牡蠣を育てるには、川の上流をきれいにしなければならぬという原理は人体でも同じこと。体のどこかに慢性炎症があり、遠隔の諸臓器に反応性の器質的や機能的な2次疾患を起こす病像を「病巣感染」という。さて、2次疾患の上流を辿るとどこに行き着くことになるだろうか。

①歯を移植すると病気がうつる
1920年代、米国のウェストン・A・プライス博士(歯科医師)

呼吸停止が1時間あたり5回以上。もしくは7時間以上の睡眠で30回以上起きること」とされる。重篤の場合、心筋梗塞や脳梗塞などによる突然死、成長ホルモンの30%減少などの影響が明らかになっていく。さらに深刻なことは、自覚していない潜在患者が1000万人とも言われていることである。

③睡眠時無呼吸症候群(SAS)と歯科

SASは、「睡眠中10秒以上の呼吸停止が1時間あたり5回以上。もしくは7時間以上の睡眠で30回以上起きること」とされる。重篤の場合、心筋梗塞や脳梗塞などによる突然死、成長ホルモンの30%減少などの影響が明らかになっていく。さらに深刻なことは、自覚していない潜在患者が1000万人とも言われていることである。SASの潜在患者をスクリーニングするために最も有効なのは歯科受診である。SAS患者の口腔内には特徴がハッキリ現れる。軟口蓋が下がり、舌位が低い、扁桃が腫れている、歯牙に着色が多い、などの症状があれば、ほぼ間違いなくSAS患者かその予備軍と言える。無自覚患者がほとんどなので、口腔内を観察した歯科医ではいびきなどの問診を正確に行い、タニタ社製スリープスキャンなどを用い、客観的な睡眠データ明示が必要となる。

④末期がんから生還した科学者

は、健康の秘訣を求めて世界14カ国の未開地を10年間にわたり調査した。そのなかで、文明国との交易が始まり短期間に食生活が激変すると、顎が正常に発達せず、歯並びが悪化して口で呼吸するようになり、虫歯が増え、関節炎や結核などの病気が増えたことが明らかになる。ここで、プライス博士は歯と全身の健康の関係を示す実験に着手した。重症の関節炎のため車いすで生活している女性の失活歯を抜き、ウサギの皮下に埋め込んでみた。すると驚いたことに、2日後にウサギは患者と同じ関節炎を発症し、10日後には感染のために死んだのである。一方、患者は抜歯後にすっきり回復し、杖な

世界的にも稀な末期胸腺がん、余命3カ月と宣告された九州工業大学名誉教授の向井楠宏の著書『末期ガン科学者の生還』(カロス出版)は、西洋医療と決別し代替医療を選択して「生還」するまでの歩みを、科学者としての緻密な視点で記録した貴重な1冊である。向井は本書のなかで、「がんは生活習慣、すなわち生(命)活(動)習慣(偏)から生まれてくる病」と言い、「その原因は、電磁波、ストレス、歯周病、虫歯にある」としている。未だ解明されていないがん治療についての意見はさまざまだが、現実に「生還」を果たした事実を学ぶところは大きい。

今井は、鼻呼吸を日本の文化に

しても歩き回れるようになった。

博士は機会あるごとにウサギの皮下に歯を埋め込んだ。最終的には歯のなかから取り出した細菌を培養してウサギに注射した。ほとんどの場合、ウサギは患者と同じか類似の疾患が発症した。心臓病、関節炎、胃潰瘍、卵巣の病気、骨髄炎、リウマチ、ありとあらゆる病気にウサギは感染し、ウサギの免疫系は弱いので大半が2週間以内に死んでしまった。ただし、健全歯を埋め込んだウサギには何ら変化がなかった。プライス博士はこの研究を1923年に発表。こうして彼は、虫歯がもとで亡くなった息子の死因を証明したのだ。

②扁桃治療で透析患者が減少

仙台市は、国内で上流医療が最も成果を上げていると評される地域である。IgA腎症は慢性的に進行する腎臓病で、適切に治療しなければ透析治療に至るとされる。腎臓内科専門医の堀田修は、診療のなかでIgA腎症患者の扁桃が腫れていることに気づき、88年に扁桃パルス療法を考案した。その後01年、02年に米国医学雑誌

する夢を持ち、上流医療の大切さを訴え続けている。向井の言を上流医療で実践するならば、①正確な歯科治療を受け、②あいうべ体操(※)によって口呼吸を鼻呼吸に変えて上咽頭の炎症を改善し、③口テープや鼻うがいを行って外部から細菌などの異物が侵入するのを徹底的に防ぐ、ということになる。その効果は、リウマチ、アトピー性皮膚炎、卵巣腫瘍、子宮筋腫、慢性疲労性症候群などの改善例が明らかになっている。

病巣感染ですべてが解決するわけではないが、病巣感染を否定する医療従事者はいないだろう。私の歯科クリニックでも掌蹠膿疱症や慢性疲労に、鼻うがい、口テープ、あいうべ体操を指示することでよい結果を出している。

第1回でも述べたようにさまざまに病態と接する医師は口腔内にも目を向け、歯科との連携をとってほしい。このことが日本の医療をスリムにするきっかけに必ずなると信じてやまない。

※あいうべ体操 口呼吸を鼻呼吸に矯正するために、口舌の周囲の筋を鍛えるトレーニング方法。